正義と善意をむさぼる悪魔

――ドラマ『ＭＩＵ４０４』におけるＳＮＳの問題の描き方について――

柿原和宏

はじめに

宰相「陛下はあらゆる徳をそなえておられ、なかんずく秀でたおかた。陛下にだけ叶うものが正義というもの。だれもが正義を愛し、正義を求め、正義はこの世に欠かせない。ところが当節はどうでありましょう。分別をもち、善意をたやさず手をさしのべても、何の役にも立たない。国中に熱病がはびこり、禍が禍を生み出している。〔中略〕これでどうして正義の芽が育ちましょうぞ。」〔中略〕

メフィストフェレス「めっそうもない、陛下にも、お歴々の皆さまにも栄光がみなぎっておりますよ。信頼あふれたところには尊厳がゆるぎません。外敵に備えがあって、善意と力と分別とが手をたずさえておりますところに、災いの入りこむ余地はない。星の輝いているところに闇はございませんとも。」

（ゲーテ『ファウスト　第二部』[1]）

ゲーテの戯曲『ファウスト』は、神と悪魔の間で賭けが行われる物語としてよく知られている。賭けの争点は、神が信頼する人間・ファウストを堕落させることができるかどうかだ。神との賭けに勝つために、悪魔メフィストフェレスは、あらゆる手を使ってファウストのもつ欲望を刺激し、誘惑して堕落させようと試みる。

第二部ではメフィストフェレスが、戦争によって秩序が崩壊した国に目をつける。皇帝に仕える道化になり代わって国家の中枢に忍び込んだメフィストフェレスは、政治の混乱に乗じてファウストの欲望を刺激する政策を皇帝に実行させ、堕落するように仕向けていく。冒頭の引用で宰相が述べるように、この国は「善意」がうまく機能せず、「正義」が生まれにくい状態にあるようだ。メフィストフェレスは「災いの入りこむ余地はない」と言いながらやすやすと皇帝に近づき、政治をコントロールして思惑を実行する。[2] 善意が機能せず、正義が失効した社会では、悪魔が活動しやすいということだろう。

テレビドラマ『ＭＩＵ４０４』（ミュウ　ヨンマルヨン、二〇二〇・六・二六～九・四放送、全一一話）にも、「メフィスト・フェレス」と呼ばれ、「悪魔」に喩えられるキャラクター・久住（くずみ　演：菅田将暉）が登場する。久住は犯罪組織に属さず、大小さまざまな暴力団や反社会的勢力を陰から操る人物だ。興味深いのは、このキャラクターが暗躍する社会状況の描き方である。『ファウスト』の世界と同じく、ドラマの世界でも人々の「善意」はうまく機能していないのだが、むしろ「正義」ははびこっている様子だった。本作では、悪魔メフィストフェレスと呼ばれる久住が、人々の善意だけではなく、正義感まで利用して犯罪を行うのである。

本論では正義と善意をキーワードとして、『ＭＩＵ４０４』の物語を分析していく。「正義」(justice)と「善」(good)という概念の区別や関係については、哲学上、さまざまな議論がなされてきた。しかし、ドラマが描く正義や善のあり方について、思想史的に考察するのが本論の目的ではない。

本論の関心は、『ＭＩＵ４０４』が正義や善意をＳＮＳの問題と関連づけて描いている点にある。人々のＳＮ

Ｓの使い方や態度を問題にするにあたり、本作は悪魔のようなキャラクターを用いる。正義や善意の問題を提示したうえで、それを悪魔に利用させるのだ。本論ではその過程を分析することで、『ＭＩＵ４０４』のＳＮＳに対する問題提起の批評性を考察していきたい。

したがって、本論ではドラマ内の使われ方をもとにそれぞれの語の意味を測定し、その描かれ方を考察する。詳しくは各節で分析していくが、本論における正義とは悪と規定した相手を攻撃することをさし、善意とは人を助けたいという気持ちをさすものだとおおまかに定義しておきたい。では、こうした正義感と善意を、悪魔はどのように利用するのだろうか。

一、悪魔としての久住

『ＭＩＵ４０４』は、警察の初動捜査チームの物語だ。働き方改革による組織の再編により、警視庁刑事部の機動捜査隊内に臨時部隊・第四機捜（第四機動捜査隊）が創設される。第四機捜は初動捜査を専門としており、犯罪事件が起きたときに最初に現場に駆けつけ、捜査の基礎方針を決める役割を担う。本作の主人公は、第四機捜に所属する刑事の伊吹藍（いぶき・あい　演：綾野剛）と志摩一未（しま・かずみ　演：星野源）で、二人はバディを組んでいる。

「ＭＩＵ４０４」というドラマのタイトルは、機動捜査隊を意味する「Mobile Investigative Unit」の「ＭＩＵ」と、伊吹と志摩のコールナンバーの「４０４」に由来する。また「４０４」は、ネット上の存在しないページを意味する「404 Not Found」にもかけられている。一時的に設置された部署で存在を公表されていないため、第四機捜はあたかも存在しないチームのようだということである。

そして、この「存在しない」という性質は、悪魔のような存在として第四機捜に立ちはだかる久住にも関わる

ものだ。本節では、久住が人々を誘惑する様子を分析する前に、そのキャラクターの特徴を確認しておきたい。

久住は正体のわからないキャラクターとして造形されている。第四機捜は、物語のさまざまな犯罪事件の陰で久住が暗躍していることをつきとめるが、情報が不足していて久住を捕えることができない。

第四機捜と久住がはじめて直接対決するのは第一〇話だが、ここでもパソコンの画面越しに、ボイスチェンジャーで変えられた久住の声とやりとりするだけである。この時点で第四機捜が把握していたのは、久住という名前と、二〇代の関西弁の男で、ＩＴ技術に詳しいという情報だけだった。久住の写真も入手するが、久住がパパラッチ対策の光を反射するナノクリスタルを貼ったスマホカバーを身につけていたため、顔を確認することはできなかった[3]。第一〇話のタイトルは「Not found」。久住を取り逃がした伊吹は、無線で応援を要請するが、久住の詳しい情報を何ひとつ伝えられずに悔しがる。

久住という名前は「クズ」に由来する偽名に過ぎず、本名ではない。ほかにも「五味」（ゴミ）や「トラッシュ」（がらくた）など、不要品を意味する偽名を好んで使い分けている。

久住の本名と同様に、その背景も物語のなかではわからない[4]。関西弁を使うが、関西にルーツがあるわけではないことが示唆される。「五味」と呼ばれるときや、第一一話で第四機捜に捕らえられたあとは、久住は標準語を用いている[5]。この正体がわからない性質を、久住は人を誘惑するときにうまく利用する。

久住はドーナツＥＰという安価なドラッグを製造し、それを用いて犯罪を行う。このドーナツＥＰをゲートウェイドラッグにして使用した人々を薬物依存にし、自分が陰からコントロールしている犯罪組織の管理下に置いて経済力や労働力を搾取していることが暗示される。

人々を誘惑してドーナツＥＰを使用させるにあたって、久住はターゲットに仲間意識をもたせることで、すすめられた錠剤をすすんで使用するように仕向けている。ここで久住は相手が仲間意識を抱くように、ターゲットに応じて相手と同じ境遇の人物を演じ分けるのである。物語内で判明しているだけでも、貧困な家庭に母と二人

で暮らした人物や、父親と二人で育った母を知らない人物など、それぞれに矛盾する背景をもつ人物を演じていたことが判明している。パソコンが得意だという浪人生のターゲットには、自分も同じだと言って親近感を抱かせたうえで、受験勉強の気晴らしとしてドーナツＥＰを差し出している。

また、薬物を使用しないターゲットには、自分の管理下にある犯罪組織の仕事をさせたり、ドーナツＥＰの売人をさせて利用している。詳しくは後述するが、第三話「分岐点」で、久住は家出した非行少年の成川岳（なりかわ・がく　演：鈴鹿央士）を仲間に引き入れる[6]。久住が住むところを提供し、仕事も斡旋してくれたため、成川はすっかり久住に懐柔されるが、やがて仕事を失敗して久住に見捨てられている。

伊吹は正体がわからない久住の存在に困惑する。人々を誘惑して薬物依存にし、都合よく利用する様子から、志摩は久住を悪魔に喩えるのだった。

伊吹「久住ってさあ…、なんなんだよ」

志摩「メフィスト・フェレスかもな。悪魔の名前。甘い言葉で人間の魂を奪う悪魔」（第一〇話）

ファウストを堕落させようとするメフィストフェレスのように、久住も人間を堕落させようとしているようだ。久住がドラッグを人々に使用させるのは、薬物依存に陥らせて都合よく利用する目的もあるが、人間を薬物中毒にして堕落させたいという動機も強いようだ。志摩は、久住が現在のドーナツＥＰに代わる強力な薬物を開発していることをつきとめ、その目的を聞く。すると久住は次のように答えている。

久住「おもろいやん。なんも考えず気持ちようなっとったらええやん。楽しいことだけしといたらええやん」

志摩「アヘンで滅びた国があったな」

久住「簡単に壊れるでえ～」（第一一話）

久住は薬物によって人間が「壊れる」様子を楽しんでいる。人々を破滅させた責任を追及されると、久住は「俺は大したことなんにもしとらん」と開き直る。「使いたいやつが薬使って…人形になりたいやつが人形になっ」たと言うように、破滅は本人の欲望に基づくもので、自分は背中を押しただけだと強調する。人間の欲望を刺激し、誘惑して堕落させる様子から、久住が悪魔のように造形されていることがうかがえるだろう。

さらに悪魔としての位置づけを強調するように、久住が超越的な立場から人々を俯瞰する存在であることも描かれている。久住は犯罪の「目的なんかない」として、自分は「阿呆どもがワーワーやってるのを高いところから見とるだけ」だと主張する。久住は高い位置からほかの人間を見下す自分のあり方にアイデンティティを感じているようだ。伊吹にそのことを指摘されると、自分が非人間的な存在であることを強調し、人間を一方的に見下して操る位置にあることを露悪的に表明するのである。

伊吹「久住お前調子乗んなよ。安全なとこから人あやつって人の人生ぶっ壊して、楽しいか」

久住「だから言うてるやん、人間やないんやから。人間がどうなろうがどうでもええねん。あんたらかて豚肉鶏肉たべてるやん」（第一〇話）

また、久住の非人間性は、犯罪の証拠を残さないことにも由来する。久住はＩＴ技術を駆使してターゲットのパソコンに侵入し、ターゲットを隠れ蓑にして証拠を残さずに犯罪を行うのだ。第四機捜は久住を捕まえようとするが、証拠をあげられずに苦悩する。

久住「なんの証拠も、なーんも残ってへん」
志摩「人間がやったことの証拠は必ず残る」
久住「そやったら俺は、人間やないんかなぁ。人間じゃないもんを裁くのは無理やな」（第一〇話）

このようにＩＴ技術に精通する久住は、人々を操るときにＳＮＳ（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を利用する特徴をもつ。よく知られるように、ＳＮＳとは、ネット上で人間関係を構築し、コミュニケーションできるサービスのことをさす。本作には現実世界のＳＮＳを反映して、「Twitter」を模した「つぶったー」や、「YouTube」を模した「Nowtube」、「LINE」を模した「LIME」や、「Facebook」を模した「Facenote」といったＳＮＳが登場している。

ＳＮＳが普及し、多くの人々がそれを用いてコミュニケーションや情報収集を行うようになったが、人々の欲望や感情のあり方はメディアの特性や機能によって大きく規定されるようになった。ＳＮＳを利用して人々の欲望や感情にうまく働きかけ、マーケティングや政治動員を行う技術も開発されている。

現代の悪魔としての久住は、こうした人々の欲望や感情に働きかける装置としてのＳＮＳに目をつけ、そこに表れる人々の欲望や感情をうまく利用していくのである。なかでも本作では、正義感と善意が取り上げられ、悪意をもつ存在に利用される様子が描かれていく。

二、暴走する正義　―誹謗中傷・ネット炎上・陰謀論―

まずは正義について、『ＭＩＵ４０４』ではどのように描かれているだろうか。本作では主人公たちの属する警察という職業を通して、正義の否定的な側面が提示されるのが特徴的だ。正義が、悪と規定した相手に暴力を

ふるう建前としても機能することが示されている。

主人公の一人である伊吹藍は、暴力と結びついた正義感をもつキャラクターだ。第一話「激突」で、配属されたばかりの伊吹は第四機捜の職務内容に不満を抱く。第四機捜の仕事は初動捜査であるため、捜査方針の基礎固めができれば仕事は終わりで、犯人の追跡・逮捕などを含むその後の捜査は別の部署に引き継がれる。伊吹はこのことに不満を述べている。

伊吹「警察って命懸けっしょ。なのに給料高くない。捜査一課なんていったら四六時中捜査に明け暮れて家にも帰れない。それでもなんでやるのかっていったら、正義感。犯人を捕まえたい。それしかないっしょ。なのに機捜はその前で終わる。もおー、張り合いない！」（第一話）

伊吹が警察をやっている動機は、犯罪者を捕まえたいという「正義感」にあるという。ところが、犯人を捕まえることに価値を置く伊吹は、捜査の過程でしばしば暴走し、犯人に暴力をふるうのだ。第四機捜に配属される前の伊吹は素行が悪いことで有名で、あるときは犯人に何度も暴行したばかりか、拳銃で撃とうとしたのだという。

志摩「麻布中央署にいたとき、犯人タコ殴りにしたって本当か？」〔中略〕

伊吹「しかもあのときは、拳銃まで出しちゃったんですよね」

志摩「はあ？」

伊吹「犯人がクソみたいな真似すっから、もう撃ってやろうかと思って。銭形警部とか、あぶない刑事とか。憧れなかった？　ほら、バンバン撃つのとかさ」

伊吹は犯人を捕まえるどころか、殺害しようとしている。このことをふまえると、犯人を捕まえるという伊吹の正義にとって重要な要素は、犯人の法的拘束ではなく、犯人に懲罰を加えることにあるようだ。伊吹がモデルとして例示するのが「銭形刑事」と「あぶない刑事」なのが示唆的だ。銃を撃つ様子が強調されるように、どちらも暴力を用いて犯人を捕まえるキャラクターである。犯罪者を懲罰することに価値を置く伊吹の正義は、自分が悪だと判断した相手に強い暴力をふるうことを許容する。銃を「バンバン撃つ」という表現からは、暴力自体への陶酔もうかがうことができる。ここで伊吹は、自分のことを悪を倒す正義のヒーローのように感じているともいえるだろう。チャンバラごっこをしながら「悪い奴は、ぶっ殺しちゃえばいいよ」（第一〇話）と言う子どもに対して、伊吹は批判しつつも「俺も、昔はそう思ってた」ことを認めている。

こうした暴力と結びついた伊吹の正義は、作中で明確に否定されている。伊吹とバディを組む元捜査一課の刑事・志摩一未は、伊吹に対して「俺は自分のことを正義だと思っているやつが、一番嫌いだ」（第一話）とひややかに告げる。志摩が正義を気取る警察を憎む理由は、のちの第六話「リフレイン」で明らかになる。志摩が以前組んでいたバディも、正義を建前に暴力をふるう刑事だったのである。

捜査一課時代、志摩は香坂義孝（こうさか・よしたか　演：村上虹郎）という若い刑事と組んでいた。香坂は、「刑事とは、正義」という信念をもっている。香坂と志摩はタリウムによる連続毒殺事件を捜査して有力な容疑者の女性に迫っていたが、彼女を犯人だと断定できる証拠をつかむことができなかった。そこで香坂は、非合法な手段で証拠を入手し、その女性を捕まえようとする。香坂はフリーアドレスから女性の住所宛に毒物を注文する。こうして偽の証拠を捏造することで家宅捜索の口実をつくり、隠されているはずの毒物を発見して女性を逮捕するつもりだったのだ。志摩に証拠の捏造は違法だと批判されると、香坂は次のように反論する。

香坂「それがなんです。大きな正義の前に、そんな些末なこと。〔中略〕あの部屋からは必ずタリウムが出る。

あいつはこの先何人殺すかわからない。家宅捜索するべきだ。こっちは命がけでやってんだ！　逮捕するんです、逃げられる前に！」

香坂は、法を逸脱していたとしても、毒殺犯を捕まえようとする自分の行為は「大きな正義」として許容されると考えている。ここでもすぐさま志摩が、「個人の自由を制限」できる警察が「法を守らずに力をふるったら、それは権力の暴走だ」と言って香坂の正義を否定している。民主主義国家では、犯罪などから個人の自由や権利を守るために警察はそれらを一時的に制限できる力をもたされているが、その力を濫用しないように法で規制がかけられている。香坂はその規制を自分の判断でやぶり、容疑者に力をふるおうとしているのだ。伊吹と同様に香坂もまた、自分が悪だと判断した相手に対して暴力をふるう。それだけでなく、正義を建前にしてその暴力を正当化しようとする。

さらに香坂の場合は、その正義のあり方が批判的に示されるだけでなく、正義が悪意に利用されることも描かれる。暴力的な手段を用いて容疑者の女性を逮捕しようとした香坂だったが、その女性は実は犯人ではなく、真犯人は別の女性だったことが発覚する。容疑者の女性は真犯人の職場の同僚であり、自分を犯人だと思わせることで捜査を撹乱し、警察をからかって楽しんでいたのだった。このエピソードは、真実を見抜けずに誤った人物を悪とみなして暴力をふるおうとした香坂のリテラシーのなさを問題化している。同時に、後述する、正義が悪意をもった存在に利用されやすいというモチーフも含んでいる。

このように、『ＭＩＵ４０４』における正義とは、暴力と結びついたもので、悪とみなした相手を攻撃することをさしている。二人の刑事を例として本作は正義の問題を提示しており、自分を正義と信じる人物が悪とみなした相手に暴力をふるっていく様子を描いている。そしてドラマがすすむと、今度は警察が、正義感による暴力を人々からふるわれるようになる。人々はＳＮＳを用いて悪とみなした警察に誹謗中傷を行うが、本作はこのＳ

ＮＳを用いた暴力にも、正義感が密接に関わっていることを描くのである。

本作がＳＮＳの問題を描くうえで重要な役割を担うのが、児島弓快（こじま・ゆかい　演：渡邊圭祐）というキャラクターである。児島は「特派員ＲＥＣ」というハンドルネームで、個人で気になった事件を撮影・取材してニュースとして配信している。児島が「Nowtube」上で主催する「ナイトクローラーチャンネル」というニュースは人気を集め、多くのチャンネル登録者をもつインフルエンサーになっていく。

児島がニュースを配信する動機のひとつは、悪と判断した相手を攻撃したいという正義感だと推察できる。第三話「分岐点」では、陸上部の高校生たちが警察にいたずらで虚偽通報を行うが、第四機捜が対応して高校生を捕まえ、家庭裁判所で処分を受けさせる。少年法の保護によって高校生たちを特定できる情報は伏せられたはずだったが、ネット上では高校名・顔写真・実名などの情報が出回るのだった。こうした状況のなかで児島は虚偽通報の事件をとりあげ、次のように配信するのである。

児島「今日の事件は、一一〇番高校生の、続報！　一一〇当番通報して遊んでいた奴らの高校が、特定されちゃいました！〔中略〕高校の陸上部の顔写真と本名も、ネットでぼかしなしで出ちゃってます。そういう大迷惑なクズはね、積極的にさらしていきましょう！」

児島は視聴者に高校生たちの個人情報を拡散することを促し、さらなる懲罰を加えようとするのだ。児島の配信を見て、第四機捜の隊長・桔梗ゆづる（ききょう・ゆづる　演：麻生久美子）は、高校生たちが「本来受ける以上の社会的制裁を受けている」ことに怒りをあらわにする。桔梗は「罪を裁くのは司法の仕事」だと指摘し、児島をはじめとして、自分の判断で悪を裁こうとする人々のあり方を非難している。

悪を攻撃したいという動機を含んだ児島の配信は、警察の不正というタレコミをきっかけにして警察批判に傾

いていく。タレコミを行ったのは、虚偽通報をした高校生たちのなかで唯一捕まらずに逃走した成川岳だった。成川は「警察にはめられた」(第七話)と嘘をつく。虚偽通報の事件は、警察が点数をかせぐためのおとり捜査によって生じたもので、高校生たちの自発的な犯罪ではなかったと告げる。成川の嘘を信じた児島は、「君は犠牲者だ」と言い、警察への反感をつのらせていく。

実は、成川を児島のもとに行くように指示したのは、久住である。正義にかられた香坂が悪意をもつ関係者に利用されたように、警察を悪とみなす児島の正義も、久住に利用されることになる。

第八話「或る一人の死」では、久住が「エトリ」という名で呼ばれる暴力団のスポンサーを始末する様子が描かれる。エトリは第四機捜の活躍で逮捕されるが、エトリを陰から操っていた久住は自分の情報が警察に漏れることを恐れた。口封じのために護送中のエトリに爆弾を積んだドローンを落下させ、護送車ごと爆破して殺害する。久住はこの爆破事件を自分にとって都合のいいニュースへと歪曲し、影響力の強い児島を利用して人々の間に拡散させるのである。

久住は、爆発の原因が警察の押収した暴力団の爆弾によるものだという情報を、児島に匿名で送信する。もともと児島は爆破で亡くなったエトリの情報が開示されないことに対して、警察による何らかの隠蔽を疑っていた。このこともあり、児島は久住の思惑通り、久住の情報を含めたさまざまな証拠を陰謀論的に組み合わせながら、ドローン攻撃は「警察の悪事を隠蔽するための、警察による自作自演」(第一一話)だと配信する。この陰謀論はＳＮＳで人気を博し、とくに隠蔽に関わったとみなされた桔梗に誹謗中傷が集まる。ここには女性の隊長である桔梗に対する差別などの動機もみることができるが、デマを真に受けた投稿者の「警察の闇を暴け！」という正義感に基づく反応も描かれている。

そして第三節で詳述するが、このあと第四機捜をはじめとする警察は、久住のフェイクニュースに見事に騙され、多くの失態を犯す。テレビもネットも警察を非難する。なかでも桔梗は、これまでの経緯もあって誹謗中傷

の的となったため、責任をとって隊長から退き、第四機捜は解体の危機に陥る。志摩は「みんな誰かを裁きたくて仕方ないんだよ」と吐き捨てるように言い、自分たちが受けている災難が、悪とみなした相手を攻撃しようとする人々の正義感によって引き起こされたことを強調する。久住は人々の正義感を利用することで、自身の犯罪を隠蔽しつつ、敵対する警察を弱体化させることにも成功するのだ。

ネット炎上は、ＳＮＳというメディアによって人間の暴力的な欲望や感情が増幅されることで起きる現象だ。ネット炎上の背景には、ＳＮＳの①可視性、②持続性、③拡散性という性質が関わっているとされる。[7] 個人が投稿した誹謗中傷は世界中の誰もがみられようになるだけではなく、削除されない限りネット上に残り続ける。さらにその誹謗中傷を見た第三者は、それを引用してほかの誰かに共有することができる。こうして一つの誹謗中傷が、それを見た第三者による便乗や反応を巻き込みながらネット中に拡散していく。一つの誹謗中傷が、ＳＮＳ上を漂ううちに多くの人々の暴力的な欲望や感情を刺激して膨れ上がり、新たな暴力を生み出していくのである。

重要なのは、誹謗中傷の投稿者が自分の行為は正義だと信じていることだ。ネット炎上の参加者は正義感から投稿するケースが多く、同じ参加者が何度も投稿する傾向があることもわかっている。[8] 近年では、「正義中毒」という言葉も生み出され、正義の側に立って悪と規定した相手に暴力をふるうときの快感も問題視されている。[9]

本作はこうしたＳＮＳ使用の現状をふまえて、正しい側に立っていると思っている人々による暴力を描くと同時に、この正義感が悪意に利用されやすいことを示すことで、正義の問題を提示している。警察は悪だという思い込みを久住に利用されて陰謀論に陥る児島をはじめとして、思慮を欠いた正義の暴走が第四機捜を追いつめていく過程を提示することで、人々が誹謗中傷するときの態度とリテラシーのなさを批判しているのだ。

このように、ＳＮＳによって膨れ上がった人々の正義感に働きかけてうまく利用している久住だが、正義という快楽に陶酔し、暴力に加担する人々を心から軽蔑している。

久住「全員死ねばええと思うてるよ。汚いもん見んようにして自分だけは綺麗やと思うてる正しい人ら」（第一一話）

自分を特別視して正義の側に置く人々を嫌悪する久住のあり方は、「自分のことを正義だと思っているやつが、一番嫌いだ」（第一話）という志摩とも共通している。正義を暴走させる人々を嫌いながらも助けていく志摩と、軽蔑しながら利用する久住とではそのあり方が異なるが、警察を主人公とするドラマにおいて、正しさを担う警察側の志摩と、悪を代表する犯罪者の久住のどちらもが、自分を正義だと信じる人間を否定するメッセージを発しているのだ。

以上のように『ＭＩＵ４０４』は、ＳＮＳによって人々の正義感が暴走しつつある同時代の状況をうまく物語に取り込んでいる。だが、本作の批評性を考えるうえでより重要なのは、ＳＮＳ使用における善意の問題をとりあげた点にある。

三、連鎖する善意　―フェイクニュース・デマの拡散―

『ＭＩＵ４０４』は、善意が迷惑な結果を引き起こした事例を描くことからはじめている。

ドラマ第四話「ミリオンダラー・ガール」では、善意による行動の例としてタイガーマスク現象がとりあげられている。タイガーマスク現象とは、二〇一〇年頃に児童養護施設の子どもたちに匿名で寄付を行うことが流行した現象をさす。この現象名は、梶原一騎の漫画『タイガーマスク』の主人公・伊達直人が、正体を隠して自身が育った孤児院に寄付を行うことに由来している。漫画をふまえて、「伊達直人」を名乗る人物が児童養護施設

にランドセルを寄付したことをきっかけに、しばらくの間全国で同様の寄付行為が流行したが、ドラマはこの現実の運動を反映している。

タイガーマスク現象が起きたとき、伊吹も触発され、「あしながデカ」を名乗って近所の施設にランドセルを寄付したという。ただし、ドラマではこうした善意に基づく行動が、必ずしも困った人々を助ける結果にはつながらないことが提示される。

伊吹は寄付後にニュースで、施設の職員が「ランドセルばかり届いて困っている」と言って寄付に抗議しているのを見て、愕然としたことを明かす。志摩はこれを聞いてあきれるとともに、善意があふれているのにいい結果がもたらされていない現状についてシニカルに指摘するのだった。

志摩「贈った奴がこんな近くにいたことが衝撃だ」
伊吹「やりたくなんなかった？」
志摩「俺はあの現象を見て、世の中にはこんなにもいいことをしたい奴がいるんだなって思ったよ」
伊吹「誰だっていいことしたいだろ」
志摩「そうかね。その割に、世界はよくならない」

ここで「いいこと」とされるのは困っている人々に対する匿名の寄付行為であり、社会的な評価や報酬とは関わらない。このことから、本作における善意とは、困っている人を助けたいという気持ちをさし、無償で利他性が強いものだと推察できるだろう。

善意に基づく行為がいい結果を生まないこのエピソードに象徴的なように、本作ではＳＮＳ上で、人々の善意がフェイクニュースの拡散に寄与してしまう状況を描いていく。

第九話「或る一人の死」では、善意に基づく情報提供によって一人の女性が犯罪に巻き込まれる。第四機捜の隊長・桔梗ゆづるは、暴力団のスポンサー・エトリに狙われている羽野麦（はの・むぎ　演：黒川智花）という女性を自宅で匿っていた。エトリは気に入った女性を篭絡する癖があり、ピアノバーで副業していた羽野麦も目をつけられる。エトリの犯罪を知った羽野麦は警察に助けを求めるが、警察はエトリを捕らえ損ね、羽野麦は裏切り者としてエトリに追われ続けていた。

そして、このエトリによる羽野麦の捜索に加担させられるのが、インフルエンサーの児島であった。児島は羽野麦が詐欺師だと聞かされたため、すっかり騙されて正義感から羽野麦の捜索に協力する。児島はすぐに「人の善意に頼る」ことが有効な方法だと述べ、羽野麦の情報を集めるための、行方不明者の捜索に見せかけたフェイクニュースを拡散する。羽野麦の写真を添付して「情報がある方はご連絡ください」と書き込むことで、ネットの集合知を利用し、羽野麦に関する情報を得ようとするのだ。

児島は困っている人を助けようとする人々の善意をよりかき立てるようにフェイクニュースを作成していく。高齢の女性を装い、行方不明の娘を探しているかのように見せかけるのである。合わせて「半年前から行方がわからず心配です」と記し、家族思いの優しい祖母が心を痛めている様子を演じることで、人々の助けたいという気持ちを刺激し、手を差し伸べようとするように仕向けていく。

また児島は、フェイクニュースがより拡散されるように、所有する複数のアカウントからその投稿を引用したリツイートを行う。それぞれのアカウントで高齢の女性の友人や羽野麦の知人などが心配する様子を演じながらフェイクニュースをシェアし、行方不明のリアリティや切迫感を演出する。

さらに、児島がリツイートの文面に「みんなで見つけましょう！」と書いていることも重要だろう。児島は連帯して人助けを行うことを呼びかける。「#人探し」「#行方不明」「#拡散希望」などのハッシュタグもつけることで、連動する投稿を可視化できるようにする。共同体に人々を動員して、ともに「いいこと」に参加してい

る快楽を与えることで、より善意をかき立て、フェイクニュースを拡散させようとするのだ。

人々の善意が連鎖して増幅していくあり方は、ハッシュタグやツリーによって投稿どうしのつながりが可視化されるＳＮＳというメディアによってもたらされたものだ。[10] ＳＮＳの機能を用いて人々の欲望や感情を操作し、動員する方法は洗練されてきているが、善意もまた、ＳＮＳによって操作・動員されやすい欲望や感情であるといえるだろう。

児島の思惑通りフェイクニュースはみるみる拡散され、羽野麦を見かけた人から情報が提供される。このことで羽野麦の居場所が発覚し、エトリに拉致されて殺害されそうになるのである。このように、悪意をもったフェイクニュースが人助けをしたいという善意によって拡散されていく過程を通して、善意が利用され、暴力へとつながる場合があることが描かれるのだ。

本作で悪魔に喩えられる久住も同様に、フェイクニュースやデマを拡散させ、人々の善意を都合よく利用している。第一〇話「Not Found」で、久住は伊吹と志摩に居場所を知られ、追われることになる。ところが、久住はフェイクニュースを拡散させることで二人から逃げおおせる。久住はなんと、ドローンを用いた爆破テロが都内一二ヶ所で行われたように見せかけるのだ。ＳＮＳに東京の市街地や建物が爆破されるフェイク動画を投稿するだけでなく、ニュースを加工し、テレビが爆破テロを報道しているフェイク動画も投稿する。合わせて、警察に爆破テロの予告をするとともに、テロの被害を訴えて助けを求める虚偽の一一〇番通報を何件か行うことで、警察がテロを信じ、動かなければならない状況を作り出す。伊吹と志摩も爆破テロが実際に起きたと信じ込み、久住の追跡とテロ対応のどちらを優先すべきか悩む状況に陥るのだ。

さらに久住は、自分を追跡する伊吹と志摩から確実に逃げるため、二人の位置情報を得るためのデマも作成する。伊吹と志摩の乗る警察車両「メロンパン号」の写真とともに、これが爆弾テロの実行犯が乗る車だというデマを投稿するのだ。文面に「情報求む！」と書き込むことで、テロの犯人を捕まえようという正義感や投稿者を

助けようとする善意を刺激し、情報が提供されやすいように誘導している。デマを信じた人々は、さまざまな理由でデマをリツイートする。正義感や善意だけでなく、好奇心や、よく意味もわからずに話題に便乗してリツイートするなどの動機も描かれる。デマは拡散され、メロンパン号を目撃した人々が写真や位置情報を投稿していく。

なかでも、逃げようとする久住を大きく手助けしたのが、メロンパン号の目撃情報をまとめて移動経路を地図にした投稿であった。正義感なのか善意なのか、作成者の動機は読み取れないが、投稿を見た久住は「便利やな～。親切さんもおるで」と発言している。ここでは久住を助けたのが、人のためを思った「親切」な行為であることが強調されるのだ。久住の「親切さん」という言い方からは、善意で動く人々を利用しやすい存在と捉えて見下していることもうかがえる。そして、善意に助けられて逃げ延びた久住は、再び犯罪を繰り返すのだ。

こうした『ＭＩＵ４０４』の善意を問題にする観点は、同時代のＳＮＳの問題を扱ったドラマと比較したときにも独自性をもつように思われる。

たとえばタイトルの通り、フェイクニュースを題材にしたドラマに『フェイクニュース』（二〇一八・一〇・二〇～二七、全二回）がある。『フェイクニュース』は『ＭＩＵ４０４』と同じく野木亜紀子が脚本を担当しており、カップうどんに青虫が混入した事件をめぐってさまざまなフェイクニュースがつくられ、ＳＮＳで拡散される様子が描かれる。

『フェイクニュース』は、フェイクニュースが拡散されるときのさまざまな動機を描く。グロテスクなものをＳＮＳで共有して盛り上がろうとする気持ちや、トラブルを起こした食品会社をあざ笑おうとする悪意などである。

しかし、とりわけ強調されるのは、異物混入を起こした食品会社を悪とみなして攻撃しようとする正義感である。カップうどんの製造元である鶴亀屋食品や、その親会社のテイショーフーズがブラック企業だというフェイクニュースがつくられ、食品の異物混入は企業体制によるものとされた。これを受けて、ある大学生がフェイク

ニュースをリツイートする。そのときに「滅びろ、ブラック企業！」と悪を叩こうとする意志を表明している。

また、ドラマ『３年Ａ組』（二〇一九・一・六～三・一〇、全一〇回）でも、フェイク動画に基づくＳＮＳの誹謗中傷によって高校生が自殺した事件が描かれる。これを受けて、死亡した高校生の担任教師・柊一颯（ひいらぎ・いぶき　演：菅田将暉）が、生徒にＳＮＳの使い方を考えさせる授業を行う。[11]

『３年Ａ組』でも、フェイクニュースの拡散にさまざまな動機が関わっていることが描かれるが、とくに強調されるのは悪意だろう。ここでは、水泳部のエースでオリンピック候補選手の景山澪奈（かげやま・れいな　演：上白石萌歌）がフェイクニュースの標的になる。景山がドーピングの薬を服用する場面を捉えたフェイク動画がＳＮＳに投稿されたとき、人々はこれまでの景山に対する嫉妬や反感のはけ口を見つけたように激しい誹謗中傷を行い、動画を拡散していく。柊は、過ちに乗じて社会的地位の高い人物を貶めようとする人々の「悪意」を非難し、「悪意にまみれたナイフで汚れなき弱者を傷つけないように、変わるんだよ！」（第一話）と訴えるのだった。

『フェイクニュース』や『３年Ａ組』と比較したとき、『ＭＩＵ４０４』の独自性が明確になるだろう。本作でフェイクニュースの拡散に加担する存在としてとくに問題にされるのは、正義感を暴走させる人々でもなく、悪意をもって相手を貶めようとする人々でもない。善意によって誰かを助けようとする人々が、暴力を手助けし、悪い結果を引き起こすことを描くのである。

たとえば災害時には、被災地を支援したいという善意によってフェイクニュースが拡散されることが指摘されている。[12] また、新型コロナウイルスの感染が拡大した状況下でも、人々を助けたいという気持ちから誤った感染予防の方法が拡散されるケースや、注意喚起の目的でワクチンの危険性をあおるデマが拡散されるケースがみられた。[13] たとえ善意によるものだとしても、フェイクニュースや、不安や危機感をあおるデマが拡散されれば、人々に混乱と緊張がもたらされ、場合によっては暴力が発生してしまう。『ＭＩＵ４０４』における善意を問題にするあり方は、まさにドラマと同時に起きていたコロナ禍のＳＮＳ使用のあり方を考えさせるような、するどい批

評性をもつものである。

とはいえ、本作はＳＮＳそのものや、人間のもつ正義感や善意を批判するだけではない。たとえば、メロンパン号に爆破テロの実行犯が乗っているというデマの拡散に対して、これまで伊吹や志摩が関わってきた人々が反応する。間違いを正したい、二人を助けたいという気持ちから、事実と実体験をもとに、デマを否定する投稿を行っていく。ほかにも、伊吹と志摩の捜査を見かけた人たちが、メロンパン号は警察車両だと推論し、テロ実行犯の車両と伝える情報は誤りだと指摘する投稿を行う。人々の正義感や善意によってデマが否定され、ＳＮＳを通して情報が正確に修正されていく様子もきちんと描かれているのだ。こうした物語は、正しいこと・善いことをするためにはリテラシーが必要であることを、改めて強調するものだろう。

また正義については、暴力に結びつくイメージを再考する試みも行われている。正義感を暴走させていた伊吹は、志摩とバディを組んで活動するうちに、正義について次のように捉え直している。

伊吹「正義ってすんげえ弱いのかもしれねえな。〔中略〕弱いから、大切にして、みんなで応援しないと、消えてなくなっちまうのかもしれないな」（第一〇話）

強いものではなく、弱いものとして正義を位置づけなおすことで、正義の側に立つものが陥ってしまいがちな力をふるいたい欲望を無効化し、暴力性を回避しようとしているのだ。このように本作では、現在の正義が抱える問題を批判的にとらえるだけではなく、新たな正義のあり方を模索し、提示しようとしていることもうかがえる。

おわりに　―人間に復讐される悪魔―

さて、悪魔としての久住は、実に寓話的な結末を迎えている。第一一話「ゼロ」ではとうとう久住が捕まるが、久住を追い詰めたのは、これまで久住が利用してきたリテラシーのない人間や、久住が堕落させた人間であった。

志摩は久住を捕えるために、久住に見捨てられた児島と組む。二人はＳＮＳで呼びかけ、ネットの集合知を利用して久住の情報を得ようとするが、捜索していることは久住に気づかれないようにしなければならない。どうすればよいか悩んだ末に、リテラシーが低い人々しか閲覧しないネット上の空間で久住の情報を収集する方法を思いつく。

志摩と児島は、まったく似ていない久住の似顔絵を投稿し、文面に「エアテロの犯人はクズミ！　詳しくはこちら」と書いてＵＲＬを貼り付ける。好奇心を刺激してＵＲＬをクリックさせ、リンク先にスパイウェアやマルウェアを仕込む典型的な詐欺の手口である。投稿を見かけた久住もそれを見抜き、「トラップみえみえ。下手くそか。誰が踏むかい」と敬遠して投稿を放置する。その間に多くの人々は見事に釣られてＵＲＬをクリックし、リンク内に設置された掲示板に久住の情報を書き込んでいくのだった。この方法で久住の居場所を知ることができたものの、志摩は「好奇心に負けてクリックする迂闊な人が多いことを憂うべきか感謝するべきか」と複雑な気持ちを吐露する。

情報提供をもとにアジトに乗り込んだ伊吹と志摩は、やがて久住を追いつめる。窮した久住は、人々の正義感と善意を利用して逃れる方法を思いつく。なんと久住は、自ら頭部を障害物に強く打ちつける。流血するが、そのままの姿で知り合いたちが集まる屋形船のなかに駆け込む。そして警察に暴行されたと叫び、痛がる演技をするのだった。

久住「この船、俺のツレが貸し切っとんねん。警察の暴行の目撃者を、大勢つくれるっちゅうわけや」

久住は警察に暴力を受けて傷ついた姿を見せることで、心配させて人々に手助けをさせるとともに、権力を濫用する警察を非難させて足止めすることで、伊吹と志摩から逃れようとしたのだ。しかし、久住の予想に反して、知り合いたちは流血する久住を見て大笑いするだけで取り合わない。人々は久住の製造したドーナツＥＰを使用して快楽に溺れ、正常な判断能力を失っている状態だったのである。悪魔は人間を堕落させすぎたのだ。正義感や善意が働かないレベルまで堕落させてしまえば、人間は久住の思い通りには動かない。久住はこれまで利用してきたＳＮＳ上のリテラシーを欠いた人々に復讐されるとともに、人間を堕落させたことのツケを払わされるのだ。

『ＭＩＵ４０４』では、ＳＮＳの普及を背景に、正義を執行したい・善いことをしたいという人々の欲望や感情がメディアによって増幅され、正義感や善意が暴力へとつながりやすい危ういものになったことを描いている。本作は人々の正義感や善意につけ込み、煽り立ててうまく利用する悪魔を設定することで、悪意に利用されないようなＳＮＳの使用のあり方や態度を意識させるとともに、正しいこと・善いことを行うには、リテラシーと暴力性の自覚が必要不可欠だと説くのである。

※『ＭＩＵ４０４』の同時代的な批評性を分析するにあたり、はじめて視聴者の目にふれた形式を重視し、ディレクターズ・カット版ではなく、通常放送版を参照した。セリフを引用する際は、脚本を書籍化した『ＭＩＵ４０４シナリオブック』（河出書房新社、二〇二〇・一二）を参照したが、ドラマ内でセリフが変わっている場合は、ドラマ内で発言されたセリフに変更している。

注

（1）ゲーテ『ファウスト　第二部』池内紀訳、集英社文庫、二〇〇四・五。

（2）『ファウスト　第二部』では、メフィストフェレスが皇帝に取り入る際に、国の財政を復興させる提案を行う。国の地下に眠っていると推定される埋蔵金を担保に紙幣を大量に発行することで、財政危機を乗り越えるのだ。このように、信用がやや不確かなものをもとに貨幣を生み出すメフィストフェレスの性質は、「暗号資産、いわゆる仮想通貨の知識が豊富」（第一〇話）だという久住の性質とも共通している。

（3）メフィストフェレスの語源は、「光を愛さない者」だという（J・B・ラッセル『メフィストフェレス　近代世界の悪魔』野村美紀子訳、教文館、一九九一・四）。自分の情報を隠すため、カメラのフラッシュを跳ね返す久住の性質とも共通している。

（4）一点だけ、久住の背景を暗示する描写がある。久住は自分の破壊願望とニヒリズムについて、「みんな泥水に流されて、全部なくしてしまえばええねん。神様は俺よりもっと残酷やで。指先一つ、一瞬で、人も街も全部さろうてしまう。全部のうなって、それでも一〇年たったらみんな忘れて、終わったことになっとる。頭の中の藻屑や」（第一一話）と表現する。一〇年前という日付と、泥水が人も街もさらうという表現からは、二〇一一年三月一一日に起きた東日本大震災が想起される。作中でも、久住が「戸籍ごと、自分ごと全部」「流された」可能性が指摘される。第一一話では、放送と同年に開かれることになっていた東京オリンピックの話題も挿入されるが、「復興五輪」を謳うニュースの映像を、久住が一瞥する場面がある。震災関係者としての久住が東京オリンピックを批判しているように見ることもできるが、本作では震災との関係を暗示する久住の経歴自体も「嘘かもしれない」ものとして相対化されている。

（5）脚本には、捕まったあとの久住のセリフに「標準語で」と書かれており、久住のルーツが関西にない可能性は制作側も意識していたと思われる（『ＭＩＵ４０４シナリオブック』河出書房新社、二〇二〇・一二）。久住を演じた菅田将暉は関西出身であるが、この点を意識して、演技の際は「東京の人から見たら関西人だけど、関西人が見たら違和感がある」（『「ＭＩＵ４０４」公式メモリアルブック』東京ニュース通信社、二〇二〇・九）関西弁を用いたという。

（6）非行少年の成川は、久住に出会って影響を受けることで、さらに道をはずれていく。『ＭＩＵ４０４』には、偶然の影響というテーマもある。本作は、偶然の出会いや出来事に影響される不安定な存在として人間を描く。このテーマはピタゴラ装置のメタファーで表現され、人間をピタゴラ装置のなかを転がる玉に喩え、偶然の出会いや出来事を玉の方向を変えるスイッチに喩えている。こうした価値観のなかで、初動捜査によって犯人とはじめに接触する第四機

捜は、道を踏み外した人にとってのポジティヴなスイッチを代表している。反対に、久住は関わった人々を悪の道に引き込んでいくネガティヴなスイッチとして造形されているといえる。

（7）山口真一『ソーシャルメディア解体全書』勁草書房、二〇二一・六。

（8）前出『ソーシャルメディア解体全書』（注7）。

（9）中野信子『人はなぜ他人を許せないのか』アスコム、二〇二〇・一。

（10）津田大介×日比嘉高『ポスト真実の時代』（祥伝社、二〇一七・七）は、連帯を可視化するハッシュタグの機能が、デモなどの運動で大きな役割を果たしたことを指摘する。

（11）『3年A組』の柊を演じたのは、久住を演じたのと同じ菅田将暉であることが興味深い。『3年A組』も『MIU404』も、菅田将暉が演じる人物が人々のSNS使用について問題喚起する構造になっている。しかし、生徒に「ヒーロー」（第一〇話）と呼ばれて尊敬される教師がSNSの使い方を指導する『3年A組』と、悪魔のような犯罪者が人々のSNSの使い方を悪用する『MIU404』では、問題の描き方と提起の方法は大きく異なる。

（12）「北海道地震でもデマ広がる　「もっともらしさ」要注意　善意背景の「拡散希望」／LINEで偽情報も」『毎日新聞』朝刊、二〇一八・九・一一。

（13）福長秀彦「新型コロナワクチンと流言・デマの拡散」（『放送研究と調査』第七二巻一号、二〇二二・一）や、「新型コロナ：新型コロナ　デマ・うわさは「善意」から　立命館大・サトウ教授が指摘」（『毎日新聞』京都版、二〇二二・五・一一）などを参照した。